



著者プロフィール

三村純也（みむら・じゅんや）本名：昌義

昭和28年5月4日、大阪、船場に生まれる。慶応義塾大学大学院博士課程修了。中世文学、芸能史、民俗学などを専攻。現在、神戸山手大学人文学部教授。中学時代より作句、昭和47年、「山茶花」入会、下村非文に師事。その紹介により、清崎敏郎、稲畑汀子の指導を併せ受ける。平成9年、石倉啓補の指名を受け「山茶花」を継承、主宰。

句集に『Rugby』『蜃気楼』、著書に『芸文伝承研究』『折口信夫事典』『大阪の俳人たち 4』（共著）など。俳人協会・日本伝統俳句協会・日本文藝家協会の各会員。(財)虚子記念文学館理事。

〈句集『常行』より転載〉〈2002年8月25日時点〉

『常行』

（自選十五句）

三村 純也

野火走る^{そのか} 暖されし如くにも
虫送すみたる稲のそよぎかな
昼寝の子起きしにあらず裏返る
夜鴨をる気配の濡の動きそむ
夜桜の根の掴みある大地かな
狼は亡び木霊は存^{なる}ふる
冬の蝶^な汝もこの地震を生き延びし
えこの花流れ込みたる田水かな
見えてゐる先もまだまだ干潟とや
筒鳥の風の遠音となりけり
雨蛙鳴くカキケコカキケコ
自問して答は一つ秋深し
飾売どこへともなく帰り行く
手花火を持たせて膝に抱き取りて
寥咲いて余呉の舟津は杭一つ